「旅鳥逍遥」3.　スイス、イタリア、東欧、ギリシャ、トルコ 編

YUWV 九州支部　　加 藤 征 治（文理、 S41 年卒）

欧州編に続いて、スイス、イタリア、そして東欧はクロアチア、モンテネグロ、スロベニア、ボスニア・ヘルツエゴビナ、さらにギリシャ、トルコの８ケ国である。

スイス連邦

スイスはフランス、ドイツ、オーストリア、イタリアの４ケ国に囲まれた山岳国として世界的に知られ，名峰が並ぶ。筆者にとって、ヨーロツパ諸国でまず最初にその名峰と麓の湖そして美しい高山植物などを観たかった国である（図１）。

図１　スイスの各都市・山岳・湖そして高山植物（右はツェルマットで撮影した花々、ちなみにスイス三大花とはエーデルワイス、リンドウ・ゲンチアナ、アルペンロ-ゼ)

スイスではバーゼル、チューリッヒ、ルツエルン、インターラーケンなど各都市はそれなりにすばらしいが、特にツエルマット、グルンデルワルト、シャモニーの三つはお気に入りである。何といっても第一に世界的な名峰マッターホルンとその麓にあるツエルマットという小さな町である。ツェルマットのトレッキングコースに参加して念願の逆さマッターホルン(4,478m)のお気に入りの傑作が撮れた（図２)。

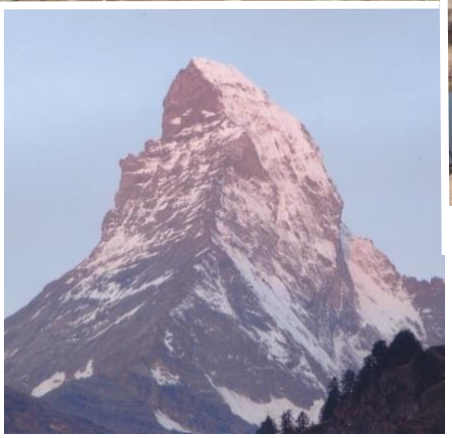


図２マッターホルントレッキング（上左）で逆さマッターホルン（右）を撮る。また、ツェルマットから朝焼けの美しいマッターホルンを遠望する（左下）。

ツェルマットのゴルナーグラート登山鉄道でゴルナ―グラートへ向かい、そこの展望台からマッターホルンやモンテ・ローザなど 4,000m 級の名峰やモンテ・ローザを源とするゴルナー氷河も一望できた。図３左上は午後にかかるトレッキングで、歌の文句「---山よさよなら、ごきげんよろしゅう、また来る時には笑っておくれ--」の通り、振り返り、振り返り下山した時の一枚である。図３の残り３枚はツェルマットの誇る人気のゴルナート展望台から、ゴルナー氷河を見たものである。眼下にはハイカー達の姿が小さく見える（図３）。

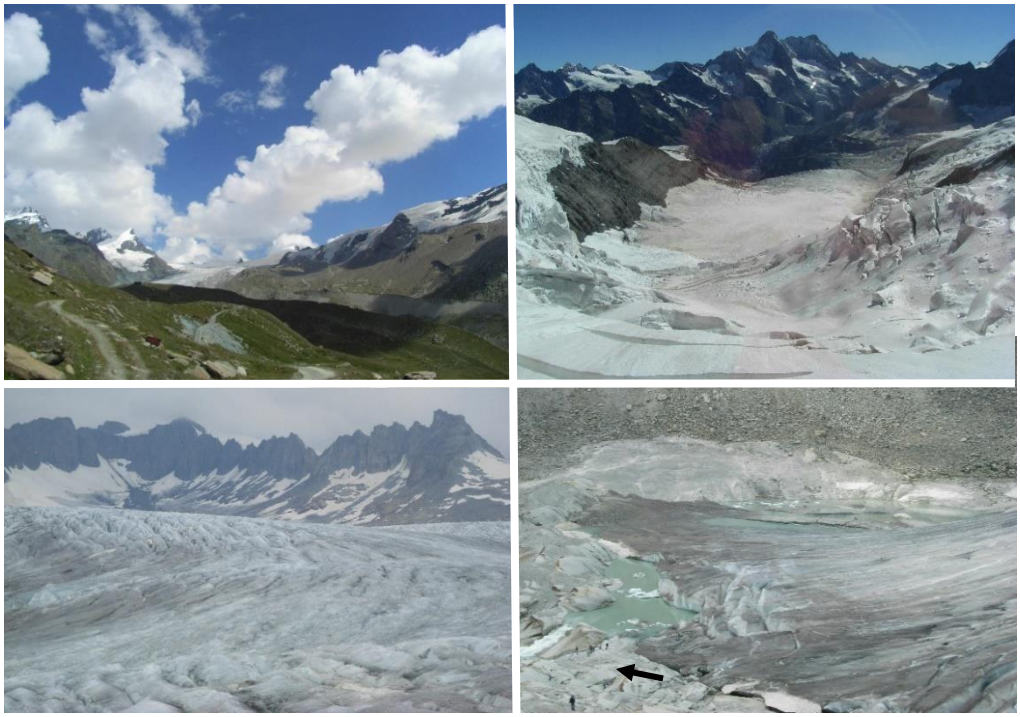
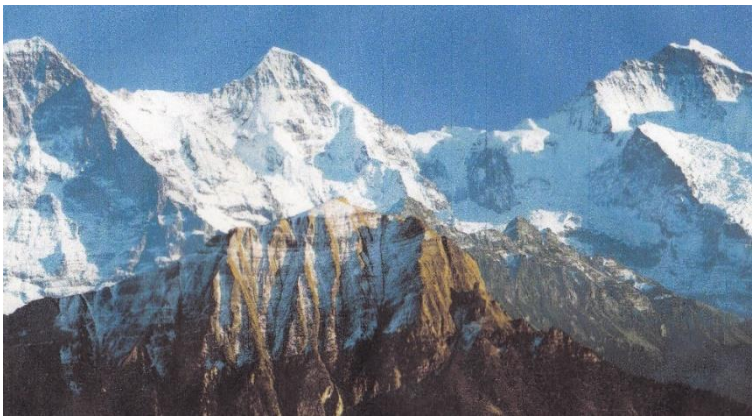


図３　午後のマッターホルン（左上）、ゴルナー氷河（右下矢印はハイカー達）

二つ目はインターラーケンの町から出発して、途中グルンデルワルトから電車でユングフラウヨッホ（登山電車ヨーロッパ最高点 3,454m、図４）へ向かう。

図４　ユングフラウヨッホの氷の彫刻



アイガー、メンヒ、ユングフラウの三大名峰（図５）を眺める。ユングフラウと近くのアレッチ氷河（図６）などヨーロッパ屈指の山塊と氷河は、『ユングフラウ、アレッチユ、ビーチホルン』として世界自然遺産となっている。

図５ アイガー3,970m 、メンヒ 4,107m 、ユングフラウ４,158m（現地絵葉書より転載）

ユングフラウ地方の自然を愛した日本の山岳小説家故新田次郎の墓碑（銘板）が、赤い電車の走るアイガー北壁の麓クライネ・シャイデック駅の裏手の高台に遺られている（OB 通信鳳翩 2020,6.エッセイ閑題二題で報告）（図７）。

図６ アレッチ氷河（左）
図７ 故新田次郎の墓碑（銘板）（左）
登山電車とアイガー北壁（右）

三つ目は、ジュネーブからレマン湖畔を走り、シャモニーへ向かい、ロープウエイで展望台へ、ヨーロッパ最高峰のモンブラン(4,807m)（図８）である。その形について最初はマッターホルンとかアイガーとかの尖峰の鋭い形をイメージしていたが、モンブランの“ずんぐりむっくり”の姿を目の前にして、思わず好きなケーキのモンブランの形に納得する。展望台から美しいスイスアルプスの山々の姿を堪能する(図９)

図８ 名峰モンブラン

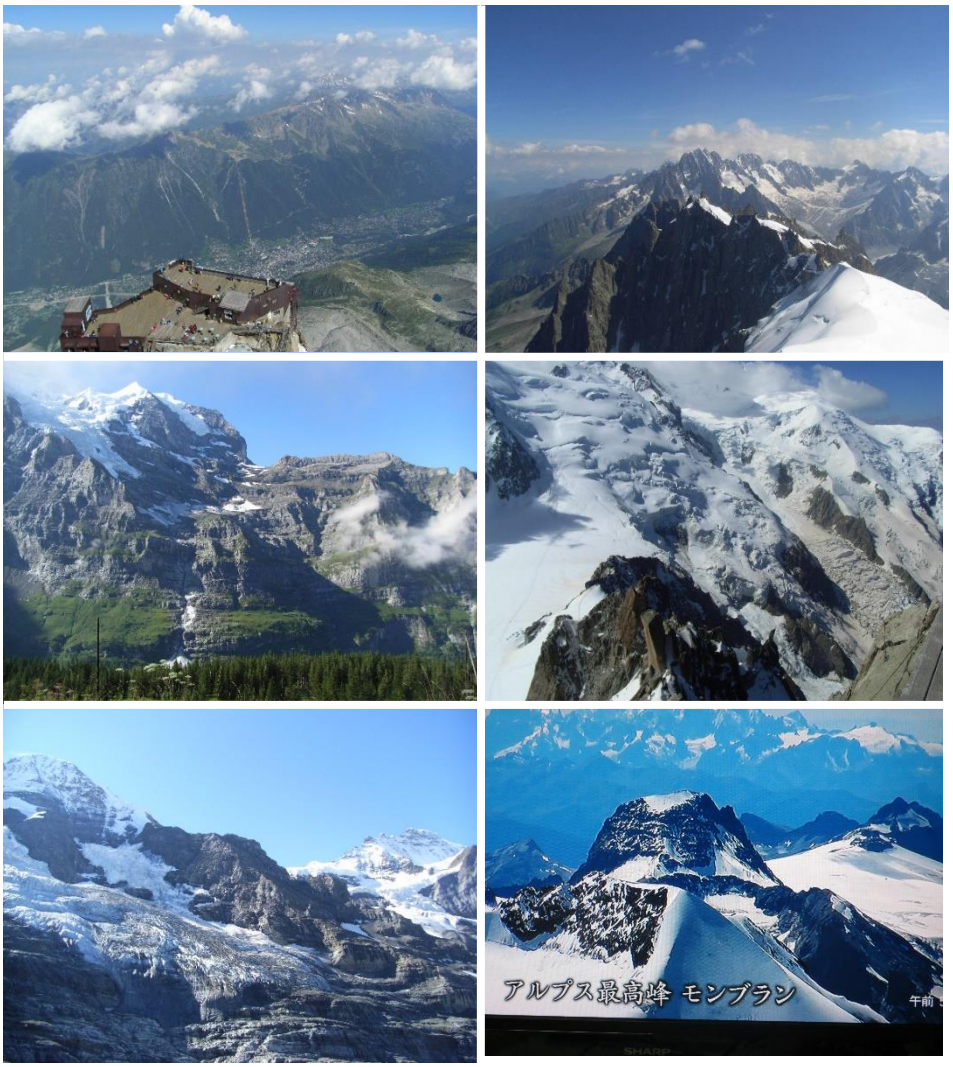


図９ スイスアルプスの山々の眺望（右下図のみ TV より転載）

スイスの中央に位置するルツェルン（図 10、夏の音楽祭で知られている）からバスでマイエンフェルトのハイジ村に向った。ここはスイスの女流作家による小説「アルプスの少女ハイジ」の故郷で、ハイジの家（図 11）やハイジの泉などがある。ハイジのモデルとなった少女が夏の間おじいさんと過ごした美しい山並みや静かな牧草地は心安らぐ山岳地域である。夏はキャンプで賑わう。

図 10 スイス・ルツエルン

図 11　アルプスの少女ハイジの故郷

イタリア共和国

イタリアといえば国土は地中海に突き出した長靴の形をした半島と２つの島（サルジニア島、シチリア島）からなる。ほぼ日本に近い大きさであるが人口は半分である。北はフランス、スイス、オーストリア、スロベニアと国境を成し、上述のマッターホルン、モンテローザ、モンブランのような高峰がある。

イタリアはかって隣国が新聖ローマ帝国やオスマントルコ帝国で囲まれていた 15 世紀頃、多くの共和国が分立していた。その中心となる成都はそれぞれの歴史と文化を受け伝えている。それ故、世界遺産登録数 58 は世界 1 位(2021)で、特に文化遺産が多い。筆者旅鳥の興味はもっぱら各都市に見られる自然と芸術である。それを求めて、長靴の上（北）から底（南）まで旅した（図 12)。

図 12 イタリア周遊、左図中の赤い丸は訪ねた都市
右はヴェノヴァの港風景

北西部にあるジェノヴァは港湾都市・『ジェノヴァ歴史地区』(世界文化遺産）は大航海時代のコロンブスの出身地である。港近くに蔦のからまる小さなコロンブスの家が遺されている。

北部のミラノの魅力は２つある。１つは何百年もの歴史に培われてきた建築物や芸術作品群である。ゴシック建築の最高傑作と言われるドゥオーモ（図 13）やレオナルド・ダ・ヴィンチの名画「最後の晩餐」などの数々の歴史的遺産がある。なお、『ミラノのドメニコ会修道院と「最後の晩餐」』はイタリアの世界文化遺産に登録されている。

図 13 ミラノのドゥオーモ

もう１つは、近代の「ミラノ・ファッション」と言われる世界最先端のアート・ファッションである。

東のアドリア海に面するヴェネチアは夢の浮島・水上都市で、運河を行くゴンドラ船祭りはかって「アドリア海の女王」と名をはせたヴェネチアの栄光を彷彿させる。「水の都」の『ヴェネチアとその潟』（世界文化遺産、図 14）も美しい。

図 14「水の都」『ヴェネチアとその潟』

ヴェネチアから少し南、イタリア中部にあるフィレンツェは 14 世紀頃から 15 世紀にかけてのルネサンス時代に大都市に発展し、金融業のメディチ家の支配により 18 世紀頃まで都市国家として栄えた。現在も威風堂々たる大聖堂など歴史的建造物や美術工芸品など『フィレンツェ歴史地区』（世界文化遺産、図 15）はルネサンス文化の体現する「芸術・花の都」を象徴している。

図 15　フィレンツェのミケランジェロ広場からの街のパノラマ

フィレンツェへの旅の計画中、美術解剖学の研究からもどうしても訪ねてみたい欠かせない場所があった。それはルネサンス期の有名な画家で偉大な科学・解剖学者でもあったレオナルド・ダ・ヴィンチ（1452-1519）の生誕の地、トスカーナ地方のヴィンチ村（図 16）である。この村はダ・ヴィンチがフィレンツエの絵画工房へ入るため村を出る前（14 歳の頃）まで過ごした所である。現在そこには巨匠ダ・ヴィンチの業績を顕彰するダ・ヴィンチ博物館が建っている。

図 16　ヴィンチ村の風景（左上、TV より転載）とダ・ヴィンチ博物館、館内の展示　とダ・ヴィンチのウィトルウィウス的人体図のある 1 ユーロ裏面。左下のイラストは WVOB 古谷眞之助氏（画伯）の筆もの（今日のイラスト 129 号、2017 年より転載）。歴史上の人物で一番逢いたい人の一人ダ・ヴィンチが、この図 16 を見たら何で言うだろうか？

12 世紀初めに完成されたロマネスク様式の大聖堂とその広場（『ピサのドゥオモ広場』、世界文化遺産）の東側に有名な鐘楼・「ピサの斜塔」がある（図 17）。この「ピサの斜塔」は 14 世紀半に建設され、5.5 度傾斜していたが、現在は 3.97 度に修正されている。塔の高さは約 60m であるが、傾斜しているので南北 70cm の誤差がある。ガリレオが「落下の法則」の実験をしたことが伝わっている。

図 17　ピサのドゥオモ広場の大聖堂（左）とピサの斜塔（右）

イタリアの中心部首都ローマでは、ミケランジェロが設計したカンピドリオ広場、フォロ・ロマーノオやコロッセオなど歴史と芸術に彩られた『ローマ歴史地区』（世界文化遺産）は都市の中の都市として素晴らしい。『ヴァティカン市国』（世界文化遺産）も中には主要な建物、ヴァティカン宮殿（博物館）とサン・ピエトロ大聖堂などがあり、「世界最小で最強の国」といえよう（図 18）。

図 18 サンタンジェロ城の塔から
ヴァテイカン市国周辺とサン・
ピエトロ広場を望む（上）
サン・ピエトロ大聖堂内（下）

ヴァチカン宮殿（博物館）の奥にあるシスティーナ礼拝堂には、ルネサンス期の彫刻の巨匠ミケランジェロの大壁画（図 19）がある。正面にキリストによって下される「最後の審判」、そして天井画「アダムの創造」などがある。天井の多くの壁画を頭を挙げてみていると首が痛くなる。

市内のヴェスタ神殿の壁の「真実の口」、「スペイン広場」、「トレビの泉」などは映画『ローマの休日』の舞台として有名である。

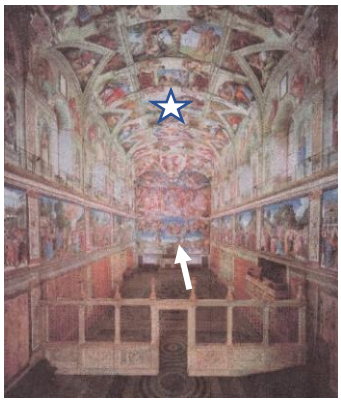


図 19 システィーナ礼拝堂の壁画（正面矢印「最後の審判」）がある。
☆印：天井の「アダムの創造」など（左）、礼拝堂内の天井の一部（右）

南イタリアの中心となるナポリ（『ナポリ歴史地区』世界文化遺産）とポンペイも、ヴェスヴィオ山（図 20）を遠くに見て素通りで、長靴の下、南のアマルフィー海岸へ向かった。

図 20　ナポリの海岸、遠景はヴェスヴィオ山

アマルフィー海岸はかってアマルフィー海洋共和国として栄えたもので、美しい海岸線と小さな町が織りなす独特の景観はすばらしい（『アマルフィー海岸』世界文化遺産）。ここには 13 世紀の大聖堂と鐘楼が残り、大聖堂の横には「天国への回廊」もある（図 21）。

図 21　イタリア南部のアマルフィー海岸（左）と天国に一番近い教会・回廊（右）

さらに、南部の長靴の底当たりの町マテーラには、密集し層になって一体化した住まい・『マテーラの洞窟住居』（世界文化遺産）（図 22）がある。また、旅の終わりの長靴の踵にある町アルベロベッロには、高い円錐形の屋根をもつトウルッリと呼ばれる円錐状の屋根を持つ家並み『アルベロベッロのトウルッリ』（世界文化遺産）がある（図 23）。これはこの地方独特な住居であるが、真っ白に塗られた壁ととんがり屋根はまるでおとき話の家のようである。

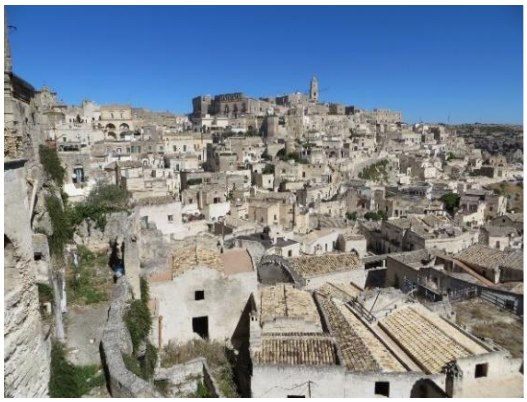


図 22 マテーラの洞窟住居

図 23 アルベロベッロのとんがり屋根

クロアチア共和国

クロアチアでは最南端でアドリア海に突き出た城壁都市ドゥブロヴニクが、「アドリア海の真珠」とたたえられ、一番人気である（図 24）。7 世紀頃から町に城壁が築かれ、町は海上交易の重要拠点となり、15～16 世紀に最盛期となった。城壁の歩道をゆつくり一回り歩いて、美しい『ドゥブロヴニ旧市街地』（世界文化遺産）を楽しむことが出来た。

図 24　連なる屋根瓦の赤が青いアドリヤ海に映えるドゥブロヴニク
矢印の各地域拡大（右上、左下、右下城壁）

北の港町スプリットには古代ローマ皇帝ティオクレティアヌスが 300 年頃築いた『スプリットのティオクレティアヌス宮殿』（世界文化遺産）がある（図 25）。ローマ皇帝の終の住処とされ、後に修復され地下宮殿も残されている。町に立っている大きな皇帝の銅像の左足の甲に触れると幸せになるとか言われており、確かに人の触れるそこだけが鈍く光つていた。

図 25 スプリットの皇帝テイオクレテイアヌス宮殿、当時海岸に建設された図（左）、地下宮殿（中）、皇帝の大銅像（右）

その他、クロアチアに残る世界文化遺産としてイタリア風聖堂『シベニックの聖ヤコブ大聖堂』や城壁に囲まれた小さな要塞島『古都トロギール』がある。聖ヤコブ大聖堂はクルカ川の河口に位置する交易港シベニックにある。16 世紀半、イタリアで流行した建築様式を取り入れ、ヴェネツィアへの憧れを形にしてできたと言われている。また、トロギールは古くギリシャの植民地時代（紀元前４世紀頃)、城壁をめぐらして要塞都市となった。

クロアチアの内陸に、高さの違う湖を水の階段で繋いでいる自然の造形が素晴らしい『プリトヴィツエ湖国立公園』(世界自然遺産）(図 26)がある。広大な広葉樹林帯を蛇行するプリトヴィツエ川があり、たまたま訪れたのが雪解けの３月中旬で、湖畔のトレッキングコースの開設初日で幸運であった。森林の中、滝と湖が織り成す幻想的な光景は素晴らしく、もう一度季節のいい時に歩いてみたいものである。

図26 クロチアのプリトヴィツエ 湖国立公園（上)、プリトヴィツエ湖の雪解けのトレッキングコース（矢印)、 湖水に映る残雪が幻想的である（下)。

モンテネグロ

クロアチアの南に隣接する小さな国で、国名モンテネグロ Montenegro は「黒い山」を意味する。アドリア海東岸で複雑に入り組んだ湾の奥に、背後を山で囲まれ要塞都市として、古くから海上交易で栄えた『コルト』(世界文化遺産）という町がある。ヨーロッパ最後の秘境と言われる原生林が残っている。『ドゥルミトル国立公園』(世界自然遺産）には多くの希少動植物が生息する。

スロベニア共和国

スロベニアにはオーストリアのザルツブルグから約 240km・長距離バスでスロベニアの町ブレッドに入った。陳腐な言葉であるが、まさに“アルプスの瞳”と称される絵のように美しい「ブレッド湖」は長旅の疲れを癒してくれる。ブレット湖に浮かぶ小島にはシンボルトともいわれる聖母被昇天教会があり、その背景に雪をかぶったユリアンアルプの姿が美しい（図 27)。

図 27 スロベニアのブレッド湖、湖の小島の城と教会、教会の塔から眺める風景が美しい（上左ガイドブックより転載）

17 世紀にバロック形式で白い塔が建てられた聖母被昇天教会は祭壇に聖母マリア像がある。内部につるされ縄を引っ張って天井の鐘を鳴らすと願いごとが叶うということで、筆者も思い切りチャレンジした（図 28)。その願いは、関係する看護・リハビリ専門学校の学生達の春の国家試験全員合格であった（結果はご利益か？100%合格！)。

図 28　重い聖母教会の鐘を思い切り突く！
（右：重い石をぶら下げた滑車方式となっている）

ブレッド湖から近くの首都リュブリャーナはルネサンス、バロック、アールヌーヴォーなど各様式の建築物が調和した小さな町である。旧市街地と新市街地に架かる竜の橋が町のシンボルである(図 29)。

図 29 リュブリャーナのシンボル竜の像

リュブリャーナの街を散策していて、教会を覗いた。中の礼拝堂はヨーロッパ一般通りであるが、覗くきっかけは入り口のドア・鉄の扉の図である。把手（矢印の位置）を拡大してよく見ると頭蓋骨である(図 30)。

図 30 スロベニア・リユブリヤーナの街の教会、右図は中の矢印部の拡大

リュブリャーナから南に少し下ったポストイナにヨーロツパ最大の不思議な形の鍾乳石が珍しいポストイナ鍾乳洞（図 31）がある。鍾乳洞内をトロッコ列車に乗って約 2km 走り、下車後も 2km 近くも奥へ歩く。洞窟の高さと広さにより、鍾乳石はいろいろな形が見られる。洞窟内部では「ホライモリ」と呼ばれる暗い洞窟に生息する珍しい両生類が住んでいる(「サンショウウオと里山歩き」、加藤征治、WVHP2022/5 掲載)。付近の野山の動物たちも冬ごもりで忙しいらしい。

図 31 スロヴェニアのポストイナ鍾乳洞の入り口(左上)と洞窟内部のソフトクリームのような形の鍾乳石（左下)、冬ごもりの動物たち（右）

ボスニア・ヘルツエゴビナ

クロアチアの隣国、首都はサラエボであるが、その南西、クロアチアに近い町モスタルは、オスマン帝国時代（15-16 世紀）に発展した町であり、古くから多民族の行きかうコスモポリスである（図 32）。

図 32 復元された現在のモスタルの古橋地域

内戦（1992-95 年）の傷跡の残る『モスタル旧市街の古橋地域』（世界文化遺産）の観光は胸迫るものがある。図 33 では、あえて“戦争と平和”と題した。1995 年に内戦が終わると、ユネスコなどの支援で古い石橋も復元された。なお、モスタルの名は町の「古い橋」と言う意味の「スタリ・モスト」に由来するという。

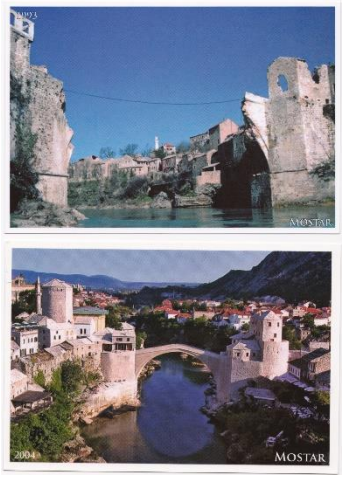


図 33 モスタルの“戦争と平和”、戦争で破壊された橋（上）、戦争前の美しい姿（下）（地元の絵葉書より転載）

ギリシャ共和国

ギリシャと言えばまず人口の 1/3 を占める首都アテネであり、旅の目的は世界遺産を求めての遺跡探訪である。ギリシャは古代遺跡を主として、エーゲ海に浮かぶ島々に神殿、修道院など様々な遺跡があり、世界文化遺産数 17 の登録（2021）がなされている. アテネに入って、アテネ・オリンピック競技場や広大な古代アゴラ・ヘファイストス（テセウス）神殿（図 34）をちらっと見て、アテネの市街地に聳えるアクロポリス（『アテネのアクロポリス』世界文化遺産）の丘に向かった。ちなみに、アクロポリウスとはギリシャ語で高い丘の上の都市の意である。

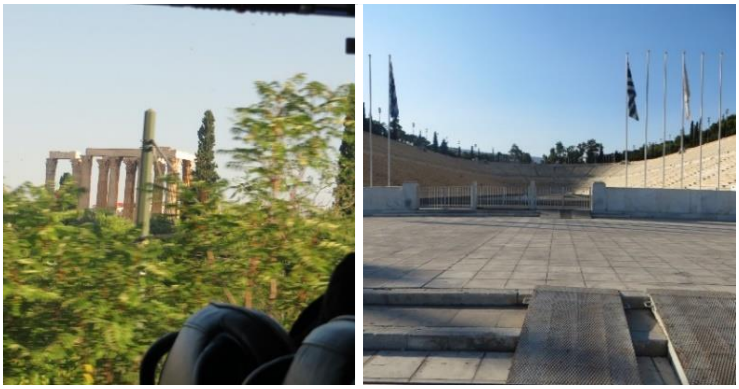


図 34 古代アゴラ・ヘファイストス神殿（左）、アテネ・オリンピック競技場（右）

アクロポリスは紀元前 15 世紀にアテネの砦として築かれ、紀元前 6 世紀には神殿が建てられ、その後破壊をへて、丘全体がアテネの守護女神アテナの聖域として復興・整備された。現在、ここ『アテネのアクロポリス』（世界文化遺産）にはパルテノン神殿、その北側にエレクティオン神殿（少女像）などのさまざまな遺跡がある。パルテノン神殿は多くの観光客が集まっていたが、残念ながら修復中であった。しかし、丘からのアテネ市街の眺めは素晴らしい（図 35）

図 35　エレクティオン神殿（左）、パルテノン神殿（中）、アクロポリスからの眺めで、奥に見えるのがリガヴィトスの丘（右）

ギリシャ・エーゲ海に輪になって浮かぶ島々はキクラデス諸島と呼ばれるが、どこも歴史ある美しい島々で、クルージングが楽しい（図 36）。

図 36 エーゲ海・クレタ海の島々（緑は立ち寄つた都市、赤字は世界遺産、左）、海洋クルージング船とその船長の似顔像（素材はポテトとスイカ、右）。船旅では船長が最高の権限者であることを揶揄して、船上パーティーでクルーたちが似顔を制作し楽しんでいる。

クレタ海に面するクレタ島は詩人ホメロスが「神々の島」と呼んだ島である。クレタ島はヨーロツパ最古のミノア文明が開化したところで、島を見なければク

レタは語れないと言われるクノッソス宮殿遺跡（約 3,700 年前）がある。これはギリシャ神話で、「クレタ島のミノス王が、一度入ったら二度と出ることができない迷路を建てて、ミノタウロスという牛頭人身の怪物を閉じ込めた」と伝えられている遺跡の丘である。発掘された遺跡には、赤い木の柱や牛の角をかたどったシンボルの他、色彩豊かな壁画（図 37）がある。

図 37 壁画「牛の上のアクロバット」

クレタ島のすぐ北に、青い屋根・白い壁の建物と海の深い藍色が印象的で人気のサントリーニ（ティラ）島(図 38)がある。遠くから雪のように島が白く見えるのもその建物のせいである。

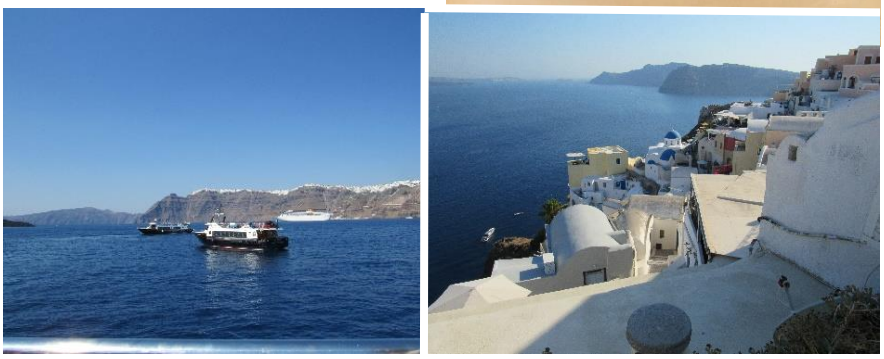


図 38 サントリーニ島

サントリーニ島よりさらに北にあるリゾートの島として人気のミコノス島は、ガイドブクに、“エーゲ海の島の代名詞”などと紹介されているように観光にポピュラーである。古代の遺跡こそないが、青い海に真っ白な家並み、教会と人気の粉ひきの６つの風車（図 39）、古き良きギリシャの風習（図 40）など楽しい。

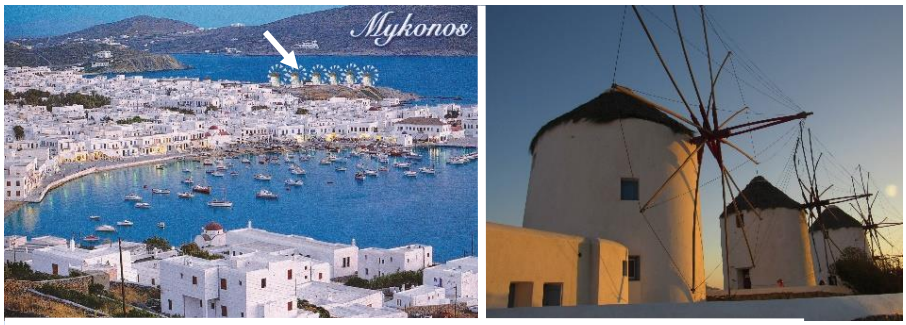
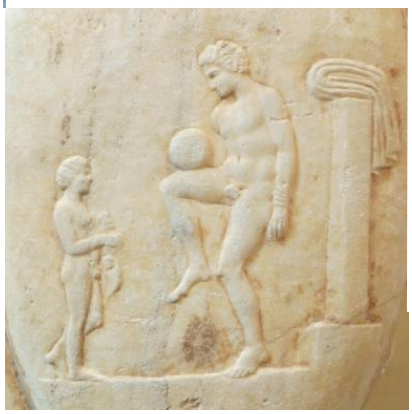


図 39 ミコノス島（左、絵葉書より転載）と島の粉ひき風車（右）

図 40 ミコノス島の湾岸に並ぶ店の風景、カボス？“TAVERNA（イタリア語、ポルトガル語）、食べるな！“と言って、皆よく食べている。

サントリーニ島の北、トルコに近いドデカニサ諸島には、聖ヨハネ騎士団の要塞の残る『ロドス島の中世都市』（世界文化遺産）があり、ヨーロツパでも人気のリゾートである。島内の彫刻、オブジェが面白い（図 41）

図 41 ロドス島海岸の
オブジェ２つ
イルカ像とハリセン
ボンの姿



アテネの国立考古学博物館見学では興味深い
いろいろな展示物がある。以下１つだけ
サッカーファンとして、興味深いものを
紹介する（図 42）。

図 42 石板に彫られた親子のボール遊び
球蹴り遊び or サッカー？

トルコ共和図

トルコという国はアジアとヨーロッパにまたがる西アジアの共和国として、日本との関係も深く、以下いくつかのことが思い上げられる。印象的なのは、1890 年和歌山県沖での台風によるエルトゥールル号遭難事件、1905 年日露戦争での日本海海戦および第一次、第二次世界大戦時の対日関係、1985 年イラン・イラク戦争時のイラン在留日本人の救出、1999 年トルコ大地震の救助・援助などである。

また、古い歌で記憶にある人もあるでしょうが、トルコの旧市街地を歌った“ウスクダラ”（トルコ民謡）（歌手、故江利チエミ）を思い出す（図 43）。

図 43 トルコ（Turkey）国旗、“USKUDARA ウスクダラ”（トルコ民謡）、イスタンブールから渡航船で旧市街地へ渡る。

トルコは東西の接点として、古くから多くの民族が行き交う土地で、そこでは歴史の繰り返しから興味ある遺跡や文化に触れることが出来る。初めてのトルコは、中央のカッパドキア、首都アンカラから西域をバスで駆け足９日間で回った。そのトルコの旅をイスタンブールから反時計回りに紹介しよう（図 44)。

なお、２度目は上述のように、エーゲ海クルーズで、トルコの西海岸、エーゲ海に面する古都市の遺跡を巡った。

図 44 トルコ西域
周遊路図

イスタンブールはボラポラス海峡を挟んで東西文明の交差点として繁栄し続けており、『イスタンブール歴史地区』は世界文化遺産として登録されている。金角湾を挟んで旧市街と新市街に分かれるが、旧市街地にイスタンブールの代表的な建造物が集中している。それは地下宮殿（貯水池)、ギリシャ正教の総本山だったアヤソフィヤ、オスマン朝時代スルタンの居城だったトプカプ宮殿、「ブルー・モスク」の名で親しまれているスルタン・アフメト・モスクなどである（図 45)。

図 45 地下貯水池の石像（左)、アヤソフィアと壁にある“真実の口”(映画「ローマの休日」のトルコ版（中)、イスタンブールとブルーモスクの青のタイル壁（下）

紀元前3000年頃エーゲ海交易で栄えたトロイはトロイ戦争(紀元前1200 年頃)に滅亡したが、「トロイの木馬」は伝説として語り継がれている(『トロイの遺跡』世界文化遺産)。トロイ遺跡の入り口広場には観光用に大きなトロイの木馬が置かれている(図46)。

図46 トロイ遺跡の「トロイの木馬」と彫刻

トロイからエーゲ海沿いに南に下ったところにエフェスという世界屈指のギリシャ・ローマ遺跡のある町がある。ここには今でも野外コンサートに使われる大劇場(図47左)がある。劇場から少し歩いたところに、ケルスス図書館(図47右)があり、建物の正面には、知恵・運命・学問・美徳の４つの意味を象徴する女性像（図中矢印）が建っている（オリジナルはウイーン博物館にある）

図47 エフェス遺跡、大劇場（左)、ケルスス図書館（右）

エフェスから内陸に向かうと、パムッカレ（トルコ語で「綿の城」の意）という町がある。多くの観光客で賑わう石灰棚があり、この『ヒラエポリス（聖なる都市）とパムカレ』は世界複合遺産として登録されている。ここには古代遺跡が沈む温泉がある。観光用にAntique Poolと名付けた温泉施設に入ると、遺跡の石柱に腰かけて温泉に浸かることができ、「旅鳥逍遥」１.のハンガリー・ブタベスト（図 17）でも記したように、古代ローマ「テルマエ・ロマエ」(ミヤザキマリ著）の世界へタイムスリップしたようであった。

図 48　パムカレの石灰棚（左）（左下のみ絵葉より転載）、
古代遺跡のあるパムカレ温泉 Antique Pool（右）

パムッカレからさらに内陸に進み、コンヤという町で、「今夜一晩！」と、神秘的な音楽、楽器と踊りセマー（旋舞）を堪能した(図 49)。

図 49 コンヤでのセマー（旋舞）（左）
トルコの珍しい楽器（右）

旅はいよいよ自然が作り上げた驚異的な奇岩群、期待の『カッパドキア』(世界文化遺産）へ、まさに大自然の神秘である。奇岩は硬い溶岩層の下の凝灰岩が浸食され、キノコ形になったという。一夜、キノコ岩を繰り抜いたような洞窟ホテルに泊まり、遺跡の夢を見る（図 50)。

図 50 カッパドキアの奇岩群(上)、　カッパドキアの洞窟ホテル（下）

旅は首都アンカラを回り市内見物後、再び出発点のイスタンブールへ戻る。

図 51 アンカラの街の風景、トルコ名物伸びるアイス、
緑のイチジクの甘漬、そして 2,3 個欲しいトルコ石